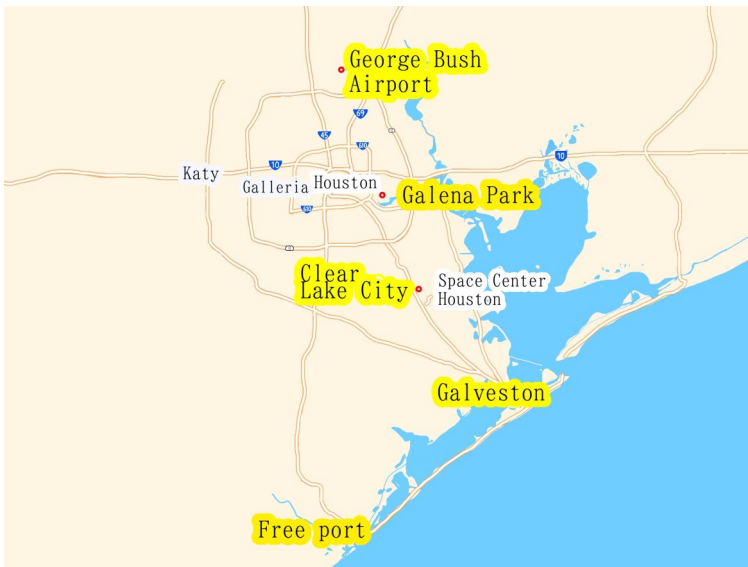


物流ハブとしてのヒューストン

アメリカ有数の人口・産業の中心である我がヒューストンですが、アメリカの物流の要でもあります。皆様にとっての“物流拠点”はどこでしょうか。NASA観光とセットで巡るGalveston? 液化天然ガス(LNG)拠点であるFreeport? 実はヒューストン市内から30分のGalena Parkにも鉄鋼製品を扱う港があります。その名も“City Docks”。コンテナ貨物専用港はClear Lake City近郊にあります。George Bush International Airportも航空貨物の拠点です。本日は普段の生活で目にするものから、意外と知られていないものまで、ヒューストンでの物流活動について3つの輸送方法に分けて紹介します。



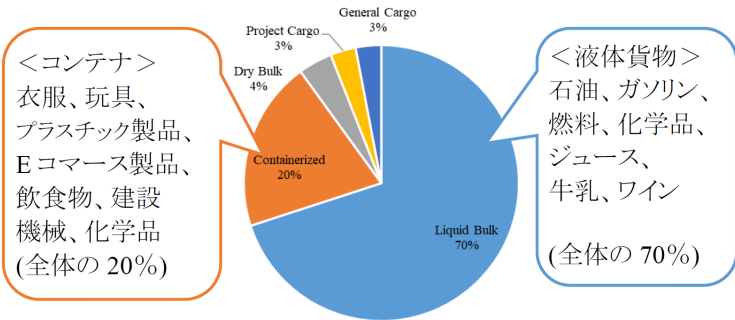
【海上輸送: 全米1位の港はヒューストン】

ロサンゼルス港はアジア貿易との拠点、ニューオリンズ港は河川輸送への玄関口ですがヒューストン港は液体貨物を中心に外国貨物取扱量・金額ともに全米1位の港です。総取扱量は276百万トン(2020年)で日本の総取扱量1位の名古屋港169百万トン(2020年)と比較しても大きいことが分かります。液体貨物とはCrude Oilや石油精製品、Liquid Chemicalsや液化されたGas Chemicals等を指します。この取扱貨物の割合からもエネルギー産業が全米・ヒューストンにとっていかに重要な産業であるかが分かります。

次に貨物量の多いのがコンテナ輸送。コンテナとは貨物を輸送するための全長20feet/40feet/53feetの鉄製の箱です。

21年はコンテナ輸送取扱高3.5百万本で全米6位の実績。東京港の取扱高5百万本には及びませんが、横浜港の3百万本より取扱数は多いです。21~22年はロサンゼルス港と鉄道の大混雑により品物到着が月単位で遅延する事態が継続的に発生しました。この解決策としてヒューストン港が活用されました。例えばAmazonは21年10月から継続的に船をチャーターし一部商品をヒューストン港に配送。ここから米国内への供給

<ヒューストン港 取り扱いトン数(ガルベトン、フリーポート港を除く)>



を続けました。WalmartやTargetなどの小売店の多くもヒューストン港を利用、その存在感を高めました。

港湾の脱炭素化に向けた取り組みも活発化しつつあります。電動フォークリフトや水素トラックの導入も始まっており、それらの動きを加速すべく日系企業との連携も期待されています。

【海上輸送 フリーポート港】

テキサス州は石油・ガスともに全米1位の生産量を誇り一部は海外に輸出されます。一方日本は世界2位のLNG輸入国。LNGは発電燃料や都市ガスの原料として人々の暮らしを支えています。米国にはメキシコ湾を中心に、液化・貯蔵・積込設備を有するLNG製造拠点がありフリーポート港からも毎月何隻ものLNG船が世界に向けて出港します。

実は同港は自動車や建設機械を輸送する船も就航しており欧州・日本からの車両輸入拠点の一つです。フリーポート港とガルベトン港はヒューストン港とは管轄が異なりますが“グレイターヒューストン”としての大切な物流拠点となります。

【航空輸送 IAH】

George Bush International Airportは全米に300以上ある国際空港の中で貨物取扱量19位(224千トン/20年)の空港です。物流の世界ではDallas/Fort Worth Airport(同11位)が有名ですが負けず劣らずテキサスにおけるハブ空港となっています。

相手先第一位は意外にも?ヨーロッパから(約40%)。次いでアジア(25%)、中東(19%)の順となっています。

取扱貨物は電子部品、機部部品、生鮮食品、航空部品。コロナ禍では医薬品の多くも輸送。貴重な物流拠点となりました。



(P2に続く)